
ホントバナシ

国見遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホントバナシ

【Nコード】

N8198C

【作者名】

国見遥

【あらすじ】

過去の奇妙な実話。ドッペルゲンガー？ただの幽霊？結局真実は謎のまま。もしかしたら僕が幻覚を見ただけという落ちなのかも！？そつだとしたら結構シヨック。

もう一人の自分に出会ったことはありますか？

実は、僕はあるのです。

嘘のような本当の話。

とある夏の暑い日の話。

「昨日スーパーで服買っていただろう」

「駅で一人でなにしてたの？」

「なにか嫌なことでもあった？公園で一人でブランコなんか漕いで」

僕は自慢ではないが、外に出るのをあまり好まない。友人と一緒に無い限りは外になんて出ない。この夏の糞暑いのに、一人で外なんてほっつき歩くわけが無い。それらは全く身に覚えのないもので、自分では断じてなかった。

前々からそういう話は聞いていた。僕の知らぬところで僕が出没するという話。どれもそれは僕ではなく、僕に非常によく似た人がいるという結論に至ったわけだが、僕は出会ったことが無かった。

ある日、友人四人で地元で有名な心霊スポットに行こうという話になり、夜八時に家を出た。その心霊スポットは山の中にある古びた民家で、昔そこで家族が一家心中したのだといったありきたりな逸話のある廃屋だ。僕たち四人は怖いもの見たさでそこに行くこと

となつたのだつた。

友人二人は懷中電灯を持参し、準備万端。僕とAは準備不足もいいところで、暗闇に入ると全くといっていいほど周囲が見えなかった。廃屋に入ってからそれはそれが顕著に現れ、無造作に置かれた家具などに幾度と無く躓いていた。

僕たち四人は最初キヤーキヤー大騒ぎで楽しくやっていたのだが、只ならぬ雰囲気にならずに少しく恐怖が足音を立てていき、次第に皆無口になつていった。

二階に上がり一番後方にいた僕は、皆が入つていった別の部屋に一人で入つていった。そこには、窓からの月明かりで照らされた古びた一枚の絵があつて、それが異常に気になつたのだ。

「あの絵をちょっと見てみよう。その後であいつらを脅かしてみるか」

などと気楽な考えだつた。絵に少しだけ近づいた僕は、月明かりで照らされたその絵がやけに気に入り、もっと近づこうとした。

そのとき、すぐ後ろに人の気配。

僕はとつさに後ろを振り返つた。

そこには、僕がいた。

こちらをじつと見ている。

その僕は僕にこう言つた。

「それ以上は駄目だ」

この僕はなにを言っているのだろう。目の前には僕がいて、その僕が僕に何らかの忠告をしている。それは明らかに不自然で、不気味で、鳥肌が立った。

「誰、お前」

そう言おうとした刹那、懐中電灯のライトが僕の視界を奪った。僕がいる部屋の入り口から友人Bが僕にライトを向けていた。

眩しくて目を細めながら、

「眩しいって」

などと言うと、

「なにやってんだよ」

と友人B。

「いや、この絵がなんか気になって」

というと友人は絵にライトを向けた。すると、

「うわっ、おまえ、そこ床抜けてんじゃない」

友人の言葉に思わず床に目をやると、暗がりであるが、床から下の階が見えた。

「ええ!？」

もし僕があのまま絵に近づいていたら大怪我をしていただろう。もしかしたら、頭でも打って死んでいたかもしれない。

あの時、もう一人の僕がいなかったら、僕はどうなっていたのだろう。もちろん目の前にはもう、もう一人の僕は既にいなかった。

あとから聞いた話だが、肝試しに来た人が数人、あの絵を見ようと近づいて、穴から落ちてしまい、大怪我をしたことがあるらしい。

彼は、僕を助けてくれたのだろうか。

それから、ときどき、僕が危ない目にあいそうなきなどは彼の声が聞こえたり、不可解なことが起こったりと、まるで僕を守るかのような出来事が起こる。

ドッペルゲンガーに出会って死ぬと言われているが、僕の場合は命を助けてくれている。彼は一体何なのだろう。ただの他人の空似なのか、ドッペルゲンガーなのか。ただ一つ分かっていることは、あれから五年以上経っているにもかかわらず、当時と変わらぬ姿の僕を、たまに見かける人が、今でもいるということだけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198c/>

ホントバナシ

2010年10月28日13時36分発行